

大学生の失敗観が自己成長主導性及び 心理的 well-being に与える影響の検討

鈴木 秀明¹ 荒井 沙也香¹ 岩田 知子¹ 丸山 亮光¹ 田中 真理¹

われわれが日常的に経験する失敗は、動機づけの低下 (Dweck & Reppucci, 1973) あるいは抑うつ症状 (Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978) などのネガティブな効果を引き起こす危険性を含むものである一方で、自己の学習や成長につながる、ポジティブな効果をもたらす可能性も示されている (Sitkin, 1992)。そこで本研究では、失敗の捉え方が自己成長に向かう動機づけに、どのように影響するのかを明らかにすることを目的とし、失敗観が自己成長主導性および心理的 well-being に与える影響について検討した。北陸地方、関東地方の大学生に対し質問紙調査を実施したところ、分析対象者は251名、平均年齢は20.06歳 ($SD=1.41$) となった。パス解析の結果、失敗観の中でも“失敗からの学習可能性”が自己成長主導性に有意な正の影響を、一方“失敗のネガティブ感情価”は、自己成長主導性と心理的 well-being を抑制することが示された。さらに、自己成長主導性の“積極的な行動”と“計画性”は、心理的 well-being の一部に正の影響を示しており、“失敗からの学習可能性”が自己成長主導性の中でも“積極的な行動”を媒介として心理的 well-being を高めることが示唆された。このことから、失敗を成長する機会としてただ認知するのみではなく、併せて、成長への積極的な行動意欲が高まることの重要性が示唆された。反面、自己成長主導性の“資源の活用”に関しては、心理的 well-being の“自己受容”を高める一方で、心理的 well-being の“自律性”に対しては抑制的に働くことが示された。したがって、自己成長主導性が全般的に心理的 well-being を促進するわけではないことが明らかとなった。

キーワード：大学生, 失敗観, 自己成長主導性, 心理的 well-being

問題と目的

人間は、日常的に数多くの失敗を経験する。失敗とは、「一人もしくは複数の人間がある行為を行うものの、それが当初の目的達成につながらない、あるいは望ましくない結果が生じる」ことである (池田・三沢, 2012)。また、失敗経験は、動機づけの低下 (Dweck & Reppucci, 1973) あるいは抑うつ症状 (Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978) などのネガティブな効果を引き起こす危険性を含むものである。一方で、その失敗経験は自己の学習や成長につながる、ポジティブな効果をもたらす可能性も示されている (Sitkin, 1992)。これらのことから、日常に潜む数多くの失敗を乗り越えて成長を果たす際には、個人がどのように失敗を捉え、活かすことが出来ているか、といった点が重要と考えられる。池田・三沢 (2012) は個人の失敗に対する捉え方や価値観を“失敗観”と定義している。その上で失敗観の構造について研究を行い、失敗観が“失敗からの学習可能性”、“失敗のネガティブ感情価”、“失敗回避欲求”、“失敗の発生可能性”の4因子で構成されていることを見出した。“失敗からの学

習可能性”は、失敗を学習の機会と考える価値観を意味している。“失敗のネガティブ感情価”は、失敗をネガティブな感情を喚起させるものとする価値観を意味している。“失敗回避欲求”は、失敗を可能な限り避けたいと考える価値観を意味している。“失敗の発生可能性”は、失敗が避けられずに、不可避に発生しうるものとする価値観を表しており、失敗に対するポジティブな価値観を含むものではない。また池田・三沢 (2012) は、失敗をネガティブなものとして捉えていけば、失敗が成長のための貴重な経験であっても、十分に振り返らずに落ち込んでしまうとした一方で、失敗を意義のあるものとして捉えていけば、悲観的に考えず、失敗から何らかの教訓を得ると述べている。Diener & Dweck (1978) は、ネガティブな出来事に対する信念の違いが適応的な行動の選択につながることを示唆しており、失敗に対しての信念や捉え方が、個人の成長を促す動機づけや行動に影響する可能性を示唆していると考えられる。

個人の成長を促す動機づけの一つに、自己成長主導性 (Personal Growth Initiative : PGI) がある。自己成長主導性は、自分の人生をよいものにしたいという意図の下に、自ら率先して自己成長を成し遂げようとする認知的な側面・行動的な側面を含む概念である (徳

1 東京成徳大学大学院心理学研究科

吉・岩崎, 2014)。Robitschek (1998) は自己成長主導性の概念を検証し、クライアントが教育プログラムで、自己成長や変化への意識が形成されたかどうかを測定するため、PGIS (Personal Growth Initiative Scale) を作成した。PGIS は幸福感、生きがいや自己受容、人生の満足度、自律性と正の相関などが認められている (Robitschek & Keyes, 2009)。また、PGIS はレジリエンスと正の相関があり、抑うつや不安と負の相関が示されている (Shorey et al., 2007; Weigold & Robitschek, 2011)。さらに、PGIS は、コーピングの自己効力感の検証として、問題焦点型コーピングとの間にも正の相関があり、情動焦点型コーピングと負の相関が確認されている (Weigold et al., 2011)。したがって、自己成長主導性は、主観的幸福感やレジリエンス、コーピング、キャリアといったカウンセリング心理学、ポジティブ心理学が扱う広範な心理的特性と関連する包括的な概念であり、PGIS はクライアントの主導的な自己成長や変化への意識を査定するという点で有用な尺度であると考えられる (徳吉・岩崎, 2014)。なお Robitschek et al. (2012) は、PGIS の修正版である Personal Growth Initiative Scale- II (PGIS- II) を作成している。

以上のことから、失敗を危機として捉えるか、成長の機会として捉えるかといった失敗観により、自己成長への動機づけが異なってくると考えられる。例えば、失敗観における“失敗のネガティブ感情価”は完全主義の失敗を過度に気にする傾向及び行動に疑いを持つ傾向と正の関連性を示し、逆に成功を希求する達成動機の個人的達成欲求や挑戦・成功欲求とは、やや弱い負の関連性が示されている。したがって、“ネガティブ感情価”が高いほど、失敗を過度に気にし、そのために課題に挑戦したり、成功を求める欲求が弱いことが示唆されている (池田・三沢, 2012)。したがって、“失敗のネガティブ感情価”は自己成長への動機づけに対して負の影響を示すことが考えられる。

一方、“失敗の学習可能性”においては、達成動機の個人的達成欲求と中程度の正の関連性を、挑戦・成功欲求とは弱い正の関連性が示されている (池田・三沢, 2012)。したがって、“失敗の学習可能性”が高いほど、課題に向き合い、成し遂げようとする意欲が高いと推察される。したがって、“失敗からの学習可能性”は自己成長への動機づけに対して正の影響を示すことが考えられる。

また、“失敗の回避欲求”は、特性不安や完全主義の完全でありたい欲求、失敗を過度に気にする傾向、行動に疑いを持つ傾向と正の関連性を持っていることが示されており、失敗を避けようとする価値観が強い人は、特性的な不安傾向が高く、成功や失敗が伴う機会を避けることで自己防衛を図っていることが示唆されている (池田・三沢, 2012)。したがって、“失敗の

回避欲求”が高いほど、この傾向により、自ら自己成長をなしとげようと積極的に行動することが難しいと考えられるため、“失敗の回避欲求”は自己成長への動機づけに対して負の影響を示すと考えられる。

“失敗の発生可能性”は、失敗に対するポジティブやネガティブな価値を含むものではない (池田・三沢, 2012)。したがって、自己成長への動機づけに対しては影響を示さないと考えられる。

PGIS 以外に自己成長の概念を包含する心理尺度としては、トラウマ体験からの人格的な成長を取り上げた PTGI (Posttraumatic Growth Inventory: Tedeschi & Calhoun, 1996) や、ストレス・コーピングにおける自己成長的側面を測る SRGS (Stress-Related Growth Scale: Park, Cohen, & Murch, 1996) などが挙げられる。また well-being を測定する尺度 (Ryff, 1989) の下位尺度や、感情の制御に関する尺度 (Garnefski, Kraaij, & Spinhoven, 2001) にも関連した下位尺度が含まれている。しかし、これらの自己成長に関わる既存の尺度の多くは、精神的な健康に問題を抱えた人々に対する自己成長の傾向を測定することを想定して作成されている (徳吉・岩崎, 2014)。一方、PGIS- II は精神的に健康な人に対する自己成長に関わる尺度であり、自己成長の概念の核心部分を取り上げている (徳吉・岩崎, 2014)。したがって、人間が日常的に経験する失敗からの自己成長という点では、PGIS- II によって測定可能な自己成長主導性が適していると考えられる。

なお、失敗観が自己成長主導性に与える影響を検討することは、失敗から抑うつ症状や恥といったネガティブな影響を受けやすく困難に陥っている人への対応を考える上で有益と考えられる。認知行動療法を個人の能力開発というポジティブな視点で応用する認知行動コーチングにおいては、クライアントが自分自身で自律的にセルフ・コーチングを行えるように、コーチが彼らの成長を促すことが重要とされている (Palmer & Whybrow, 2007)。つまり、失敗を含む困難を抱える人に対しては、自己成長主導性を高めることが重要と考えられる。しかし、動機づけである自己成長主導性に、個人の失敗観が影響していると考えられるのであれば、対応策を考える際は、失敗観と自己成長主導性の両方を考慮する必要があるだろう。そのため、失敗観と自己成長主導性の関連性を明らかにすることは重要と考えられる。

そこで本研究では、失敗観が自己成長主導性に与える影響について明らかにすることを目的とする。なお、これまでの議論を踏まえて、本研究では以下の仮説を設ける。

仮説1: “失敗のネガティブ感情価”は自己成長主導性に対して負の影響を示す。

仮説2: “失敗からの学習可能性”は自己成長主導性

に対して正の影響を示す。

仮説3: “失敗回避欲求” は自己成長主導性に対して負の影響を示す。

仮説4: “失敗の発生可能性” は自己成長主導性に対して影響を示さない。

また、ただ失敗を成長の機会として認知するだけでなく、自己成長へと動機づけられることによって、最終的な well-being が変容すると考えられる。したがって、失敗観と自己成長主導性の関連性が心理的 well-being に与える影響についても検討を行う。しかし、自己成長に対する動機づけを対象とするため、心理的 well-being (西田, 2000) では “人格的成長” と “自律性”, “自己受容”, “環境制御力” といった自己に関わる要因を取り上げることとする。

方 法

調査対象者

調査対象者として北陸地方、関東地方の大学に所属する大学生297名に質問紙法による回答を求めた。その内、有効回答が得られたのは252名であったが、本

Table1 失敗観尺度の因子分析結果

項 目	因 子				M	SD
	1	2	3	4		
第1因子: “失敗からの学習可能性”						
3-27失敗とは、前に進むための原動力である。	.84	-.03	-.02	-.03	3.66	1.00
3-28失敗することで、成長が促される。	.83	.01	.00	.05	3.85	.96
3-11失敗とは、新しい自分を発見する機会である。	.82	.01	-.04	-.16	3.61	1.06
3-6失敗とは、成長するための最大のチャンスだ。	.80	-.12	.07	.05	3.81	1.04
3-10失敗とは、そこから学習するための資源である。	.78	-.02	.05	.01	3.95	.91
3-22失敗とは、これまでの自分の価値観を変える機会である。	.77	.09	.04	-.05	3.55	.96
3-12失敗とは、自分が何に取り組んだかを振り返る機会である。	.72	.07	-.09	.03	3.73	1.06
3-33失敗を乗り越えることで、成長することができる。	.72	.04	-.04	.03	3.95	.92
3-30失敗をすることで、一度むけることができる。	.69	-.02	-.05	.06	3.60	.93
3-17失敗は、基本に帰ることを思い出させてくれる。	.64	.01	.06	-.03	3.57	1.06
第2因子: “失敗のネガティブ感情価”						
3-3失敗とは、取り返しのつかないことだ。	.02	.89	-.08	-.09	3.85	1.04
3-13失敗すると、自信を失ってしまう。	.01	.87	-.10	-.02	3.75	1.13
3-9失敗すると、自分を否定してしまう。	-.02	.85	-.02	-.06	3.46	1.24
3-7失敗したことを、私は後々まで気にしてしまう。	-.08	.80	-.06	.01	3.87	1.09
3-32失敗すると、しばらくは立ち直れない。	-.02	.76	.07	-.03	3.42	1.15
3-29失敗すると、私は悲しい気持ちになる。	.11	.73	.01	.03	3.97	.98
3-8失敗すると、私は失望してしまう。	.03	.67	.18	-.02	3.19	1.25
3-15失敗とは、つらい経験である。	.01	.56	.09	.08	3.94	.96
3-19失敗とは、心配の種になることだ。	-.01	.49	.03	.20	3.98	.87
第3因子: “失敗回避欲求”						
3-34失敗とは、あってはならないことだ。	.05	-.06	.93	-.10	2.36	1.25
3-21失敗とは、決して起こしてはいけないことだ。	-.03	-.13	.90	.02	2.27	1.20
3-14失敗とは、決して許されないことだ。	-.03	.02	.82	-.12	2.24	1.18
3-20失敗とは、情けないことである。	.01	.19	.63	.13	2.99	1.21
3-16失敗とは、汚点である。	-.03	.24	.57	.07	2.92	1.22
3-24失敗とは、避けるべきものである。	.01	.05	.57	.06	3.60	1.11
3-23失敗とは、周りから責められるものである。	-.03	.01	.53	.09	3.18	1.15
3-4失敗すると、自己嫌悪に陥ってしまう。	-.10	.12	.53	-.08	2.65	1.14
第4因子: “失敗の発生可能性”						
3-1失敗とは、頻繁に起こることだ。	-.07	.03	-.08	.88	4.21	.76
3-2失敗は日常茶飯事だ。	.06	-.03	.05	.87	4.09	.89
3-26失敗とは、よくあることだ。	.10	.04	.00	.68	4.20	.74
3-31失敗とは、当たり前になってしまうものだ。	-.16	-.03	.04	.32	3.46	1.12
因子間相関	1	-.15	-.41	.12		
	2		-.60	.32		
	3			-.12		
	4					

研究では一般大学生を対象にした研究であることから、分析対象者として30歳以下で、かつ記入漏れがない251名 (男性155名, 女性96名), 平均年齢は20.06歳 ($SD = 1.41$) を分析対象とした。

実施時期と倫理的配慮

調査は2014年10月～11月上旬にかけて実施した。大学の授業時間内に許可を得て質問紙を配布し、回答を求めた。なお、本研究は東京成徳大学大学院研究倫理委員会の承認を得た上で調査を実施した。

質問紙の構成

注意事項と倫理的配慮に関する記載と、年齢・性別の記入欄を設けた上で、以下の三つの尺度で質問紙を構成した。

1. 自己成長主導性

自己成長主導性を測定するために、徳吉・岩崎 (2014) の自己成長主導性尺度 II (以下; PGIS- II) を用いた。この尺度は、“積極的な行動”, “変化への準備”, “資源の活用”, “計画性” の四つの下位因子, 計16項目で構成されている。6件法 (1= “全く当てはまらない” から6= “かなり当てはまる”) により回答を求めた。

2. 失敗観

失敗観を測定するために、池田・三沢 (2012) の失敗観尺度を用いた。この尺度は、“失敗のネガティブ感情価”, “失敗からの学習可能性”, “失敗回避欲求”, “失敗の発生可能性” の四つの下位因子, 計34項目で構成されている。5件法 (1= “全くそう思わない” から5= “非常にそう思う”) により回答を求めた。

3. 心理的 well-being

心理的 well-being を測定するために、西田 (2000) の心理的 well-being 尺度を用いた。本研究では西田 (2000) の全6次元のうち、“人格的成長”, “自律性”, “環境制御力”, “自己受容” の4つの下位尺度, 計29項目を使用した。回答は、(1= “全くあてはまらない” から6= “非常にあてはまる”) の6件法で実施した。

結 果

各尺度の因子構造の確認

分析に先立ち、各尺度における因子構造の確認を行った。PGIS- II は先行研究 (徳吉・岩崎, 2014) の各下位尺度ごとに主成分分析を行った結果、主成分負荷量が .40 以上であったため、各下位尺度の一次元性が確認されたと判断し、先行研究の因子構造に倣うこととした。失敗観尺度については、探索的因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行った。因子負荷量が .30 に満たない項目 (“失敗とは、気をつけていても起こるものだ。”, “失敗とは、どんなに自信があっても起こってしまうものだ。”, “失敗とは、避けられないものである。”) を削除し、再度因子分析を行った

Table2 各変数における基礎統計量, α 係数及び性差の検討結果

		全体 (N=251)	男性 (n=155)	女性 (n=96)	t 値 (df=249)
自己成長主導性	M	57.35	57.96	56.36	.94
	SD	13.08	13.66	12.09	
積極的な行動 ($\alpha = .82$)	M	15.24	15.33	15.09	.44
	SD	4.10	4.34	3.69	
計画性 ($\alpha = .88$)	M	18.07	18.51	17.35	1.74
	SD	5.13	5.21	4.95	
変化への準備 ($\alpha = .79$)	M	13.51	13.78	13.08	1.35
	SD	3.99	4.13	3.73	
資源の活用 ($\alpha = .69$)	M	10.53	10.34	10.83	-1.23
	SD	3.07	3.23	2.77	
失敗観	M	108.86	108.12	110.04	-1.04
	SD	14.26	14.43	13.96	
失敗からの学習可能性 ($\alpha = .93$)	M	37.26	36.65	38.26	-1.60
	SD	7.79	8.41	6.58	
失敗のネガティブ感情価 ($\alpha = .92$)	M	33.42	32.89	34.28	-1.41
	SD	7.60	7.86	7.12	
失敗回避欲求 ($\alpha = .90$)	M	22.21	22.52	21.71	.86
	SD	7.23	7.50	6.79	
失敗の発生可能性 ($\alpha = .73$)	M	15.96	16.07	15.79	.81
	SD	2.65	2.79	2.41	
心理的 well-being					
人格的成長 ($\alpha = .84$)	M	38.31	38.45	38.09	.43
	SD	6.37	6.75	5.74	
自律性 ($\alpha = .79$)	M	27.93	28.24	27.43	1.00
	SD	6.25	6.64	5.57	
自己受容 ($\alpha = .85$)	M	23.80	24.70	22.34	2.69**
	SD	6.83	7.16	6.00	
環境制御力 ($\alpha = .84$)	M	23.26	23.55	22.78	1.15
	SD	5.20	5.61	4.44	

※**は1%水準, *は5%水準で同じ行の尺度得点に男女差のある事を示す。

結果, 先行研究 (池田・三沢, 2012) と同様に, 失敗からの学習可能性, 失敗のネガティブ感情価, 失敗回避欲求, 失敗の発生可能性の4因子構造が確認された (Table1)。心理的 well-being に関しては, 各下位尺度ごとに主成分分析を行った結果, 全ての各下位尺度の主成分負荷量が .40以上であったため, 一次元性が確認された。各下位尺度の信頼性の程度を確認するため, Cronbach の α 係数を算出し, Table2に示した。

各変数の記述統計

次に各変数の性差を検討するため, t 検定を行い, その結果を Table2に示した。

その結果, “自己受容” において, 男性の方が女性よりも有意に得点が高かった ($p < .01$)。しかし, それ以外の変数においては有意な差が認められなかった。

次に各変数間の相関係数を算出した (Table3)。PGIS- II については, “積極的な行動” が, “失敗からの学習可能性”, “人格的成長”, “環境制御力” と高い正の相関がみられた。また “計画性” と “変化への準備” は, “環境制御力” とかなり高い正の相関がみられた。また, “計画性” においては “自己受容” と

中程度の正の相関がみられた。失敗観尺度については, “失敗からの学習可能性” では, “人格的成長”, “環境制御力” において中程度の正の相関を示した。“失敗のネガティブ感情価” は, “自律性”, “自己受容”, “環境制御力” と中程度の負の相関を示した。“失敗回避欲求” は, “人格的成長”, “環境制御力” に対して中程度の負の相関が見られた。

失敗観から自己成長主導性, 心理的 well-being への影響

失敗観が自己成長主導性を介して, 心理的 well-being にどのような影響を及ぼすかを検討するため, 第一水準に失敗観, 第二水準に自己成長主導性, 第三水準に心理的 well-being とするパス解析 (ステップワイズ法) を行った (Figure1)。なお, VIF 値は全て2.0以下であり, 多重共線性の問題は見られなかった。失敗観が自己成長主導性に与える影響としては, まず “失敗のネガティブ感情価” から, “積極的な行動”, “計画性”, “変化への準備” に対して負の影響が認められた。“失敗からの学習可能性” は, 自己成長主導性の全下位因子に対して正の影響が認められた。“失敗回避欲求” と “失敗の発生可能性” から, 自己成長主導性に対しての影響は示されなかった。

失敗観と心理的 well-being の影響は, “失敗からの学習可能性” から, “人格的成長”, “環境制御力” に対しても正の影響が示された。

自己成長主導性と心理的 well-being の影響では, まず “積極的な行動” から, “人格的成長”, “自律性”, “環境制御力” に対して正の影響が認められた。“計画性” は, “自己受容” と “環境制御力” に対して正の影響を与えていた。“変化への準備” は, 心理的 well-being に対して影響を示さなかった。“資源の活用” は, “自己受容” に対して正の影響を示していた一方で, “自律性” に対しては負の影響を与えていた。

考 察

失敗観が自己成長主導性に及ぼす影響

本研究では, 失敗観が自己成長主導性に対して与える影響について仮説を設定した。まずは, その仮説について検討する。“失敗のネガティブ感情価” は, “積極的な行動”, “計画性”, “変化への準備” に対して負の影響が認められた。したがって, 仮説1はおおむね支持された。“失敗からの学習可能性” は, 自己成長主導性の全下位因子に対して正の影響が認められたため, 仮説2についても支持された。失敗回避欲求” と “失敗の発生可能性” から, 自己成長主導性に対しての影響は示されなかった。このことから, 仮説3は支持されなかったが, 仮説4は支持された。

“失敗回避欲求” の強い人は, 特性的な不安傾向も高いため, 成功や失敗が伴う機会を避けることで自

Table3 下位尺度間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
自己成長主導性	1											
積極的な行動		2										
計画性			3									
変化への準備				4								
資源の活用					5							
失敗観						6						
失敗からの学習可能性							7					
失敗のネガティブ感情価								8				
失敗回避欲求									9			
失敗の発生可能性										10		
心理的 well-being											11	
人格的成長												12
自律性												
自己受容												
環境制御力												

※ ** は1%水準, * は5%水準で有意(両側)であることを示す。

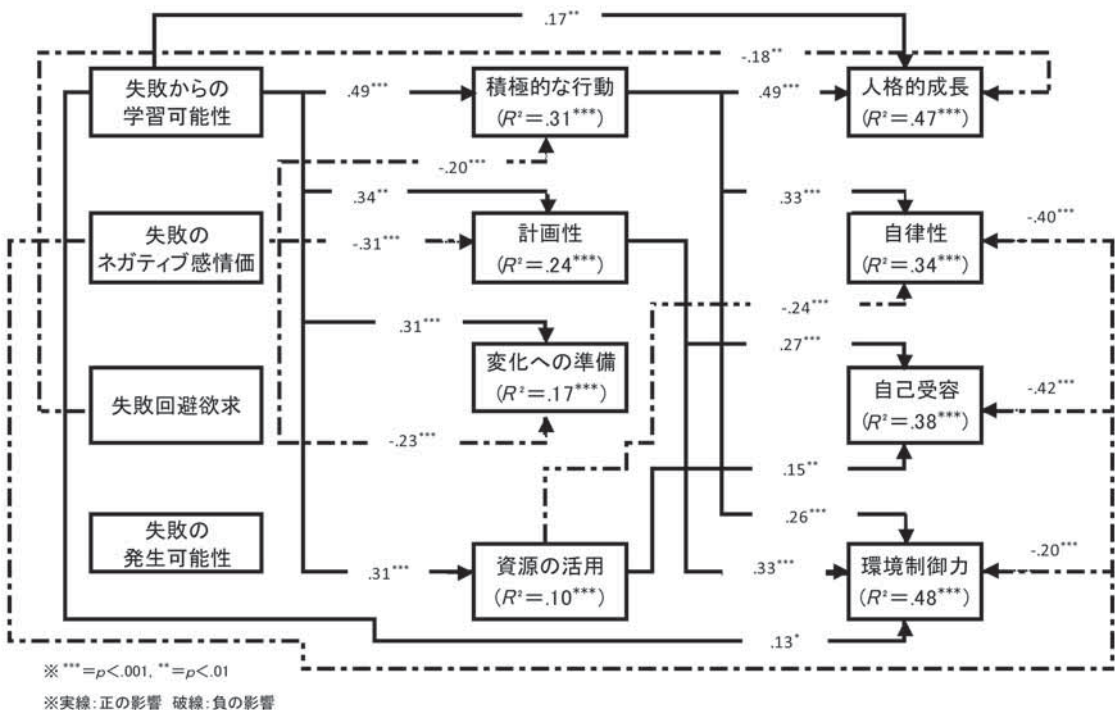


Figure1 失敗観から自己成長主導性を介した心理的well-beingにおけるパスダイアグラム

己防衛を図っていると推察されている (池田・三沢, 2012)。すなわち, “失敗回避欲求” の生じる背景には, “失敗のネガティブ感情価” が関係している可能性がある。実際に本研究においても, “失敗回避欲求” と “失敗のネガティブ感情価” には高い正の相関が認められた。そして, “失敗のネガティブ感情価” から自己成長主導性に対しては, 負の影響が認められた。したがって, 自己成長主導性に対しては “失敗のネガティブ感情価” の方が “失敗回避欲求” よりも影響が大きいために, “失敗回避欲求” から自己成長主導性に対しての影響は認められなかったと思われる。

なお, “失敗からの学習可能性” は, 自己成長主導

性の全下位因子に対して正の影響を与えており, 他の失敗観因子で自己成長主導性に対して正の影響を与えているものはなかった。したがって, 自己成長主導性を促進する失敗観としては, 特に “失敗からの学習可能性” が重要と考えられる。

心理的 well-being への影響

失敗観から心理的 well-being に対して直接的に正の影響を与えていたものは, “失敗観からの学習可能性” のみであった。“失敗観からの学習可能性” は, “人格的成長” と “環境制御力” に対して正の影響が認められた。

一方、自己成長主導性を媒介することで、心理的 well-being の“自律性”、“自己受容”に対しても正の影響が認められた。まず、“失敗からの学習可能性”が“積極的な行動”を媒介することで“自律性”に対して正の影響が認められた。このことより、失敗経験を自己の学習や成長の機会として捉え、絶えず成長しようとするための機会を探し、決して逃さないといった意識を強く持つ人は、成長するための行動を能動的に行くと推察される。また“積極的な行動”を取るには、“自律性”で挙げられるような世間からの見られ方や社会的な望ましさにとらわれることなく、判断や行動の決定を自分の考えや価値観に基づいて行うと考えられる。

“自己受容”に対しては、“失敗からの学習可能性”から“計画性”を媒介することで正の影響が認められた。失敗経験を自己の学習や成長の機会と捉える人は、その失敗経験をどのように自分の糧にできるかといった展望を持つと考えられる。その結果、自分の目指す実現可能な目標や計画の設定といった“計画性”が育まれると思われる。実現可能な計画をたてることは、失敗から成長した自分をイメージしやすくなり、将来を肯定的に捉えることができると考えられる。将来を肯定的に捉えることができることで、現在の自分を受容できることが示唆される。なお、“自己受容”に対しては、“失敗からの学習可能性”から“資源の活用”を媒介することで正の影響が認められた。失敗からの学習可能性を見出した場合、その失敗を糧に成長しようとする行動をすると考えられる。しかし、個人の能力には限りがあり、どうしても他者に頼らなければならない場合がある。Robitschek et al. (2012) は、自己成長のための個人の資源には必然的に限界があり、他者や社会的資源を活用することにより、自己成長が促進する可能性についても指摘している。他者に頼る場合は、当然、その他者に失敗した自分や自分の悪い面を開示する必要がある。そして、自分のネガティブな面を開示し、他者に受け入れられることで、結果として、自分自身が良い面も悪い面も含めて、ありのままの自分を受け入れることができると示唆される。

一方、“資源の活用”を媒介することで“自律性”に対しては負の影響が認められた。“資源の活用”には、他者や周囲の資源や支援を探し、活用するといった他力に頼ろうとする一面があると推察される。そのため、周囲の状況や他者の意見・判断、社会的な評価にとらわれずに、自分の意思や行動を決めることができるといった“自律性”とは反するものであると考えられる。

全体考察

“失敗からの学習可能性”から“積極的な行動”、“計画性”を媒介し、心理的 well-being に対して全体的に正の影響を与えていることが示された。特に“積極

的な行動”は、心理的 well-being の“人格的成長”、“自律性”、“環境制御力”に対して正の影響を与えていた。したがって、“失敗からの学習可能性”が自己成長主導性の中でも“積極的な行動”を媒介として心理的 well-being を高めることが示唆された。このことから、失敗を成長する機会としてただ認知するのではなく、併せて、成長への積極的な行動意欲が高まることの重要性が推察された。

反面、自己成長主導性の“資源の活用”に関しては、心理的 well-being の“自己受容”を高める一方で、心理的 well-being の“自律性”に対しては抑制的に働くことが示された。したがって、自己成長主導性が全般的に心理的 well-being を促進するわけではないことが明らかとなった。

自己成長主導性は、自己成長に関わる教育プログラム、カウンセリングやコーチングなどの介入場面で活用されることが期待されている(徳吉・岩崎, 2014)。また、自己成長主導性は職業の意思決定や自己効力感に関連している(Bartley & Robitschek, 2000)。このことから、実際のキャリア教育の場面で検討することが望まれている(徳吉・岩崎, 2014)。しかし、自己成長へ向かう行動の過程では、必然的に失敗経験をすることになるだろう。そして、失敗観によっては失敗を経験することで、自己成長主導性が低下してしまうことも考えられる。したがって、失敗観が自己成長主導性を媒介して、心理的 well-being に与える影響を明らかにしたという点で、本研究は意義があると言えるだろう。

引用文献

- Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P., & Teasdale, J.D. (1978). Learned helplessness in humans : Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, 87, 49-74.
- Bartley, D. F., & Robitschek, C. (2000). Career exploration : A multivariate analysis of predictors. *Journal of Vocational Behavior*, 56, 63-81.
- Diener, C.I., & Dweck, C.S. (1978). An analysis of learned helplessness : Continuous changes in performance, strategy and achievement cognitions following failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 451-462.
- Dweck, C. S., & Reppucci, N. D. (1973). Learned helplessness and reinforcement responsibility in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 25, 109-116.
- Garnefski, N., Kraaij, V., & Spinhoven, P. (2001). Negative life events, cognitive emotion regulation and depression. *Personality and*

- Individual Differences, 30, 1311-1327.
- 池田 浩・三沢 良 (2012). 失敗に対する価値観の構造—失敗観尺度の開発— 教育心理学研究, 60, 367-379.
- 西田 裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443.
- Palmer, S., & Whybrow, A. (Eds.) (2007). Handbook of coaching psychology. London: Routledge. (パルマー, S.・ワイブロウ, A. 堀 正 (監修・監訳) 自己心理学研究会 (訳) (2011). コーチング心理学ハンドブック 金子書房)
- Park, C. L., Cohen, L. H., & Murch, R. (1996). Assessment and prediction of stress-related growth. Journal of Personality, 64, 71-105.
- Robitschek, C. (1998). Personal growth initiative: The construct and its measure. Measurement and Evaluation in Counseling and Development, 30, 183-198.
- Robitschek, C., Ashton, M. W., Spering, C. C., Geiger, N., Byers, D., Schotts, G. C., & Thoen, M. A. (2012). Development and psychometric evaluation of the Personal Growth Initiative Scale-II. Journal of Counseling Psychology, 59, 274-287.
- Robitschek, C., & Keyes, C. L. M. (2009). Keyes' model of mental health with personal growth initiative as a parsimonious predictor. Journal of Counseling Psychology, 56, 321-329.
- Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. Journal of Personality and Social Psychology, 57, 1069-1081.
- Shorey, H. S., Little, T. D., Snyder, C. R., Kluck, B., & Robitschek, C. (2007). Hope and personal growth initiative: A comparison of positive, future-oriented constructs. Personality and Individual Differences, 43, 1917-1926.
- Sitkin, S. B. (1992). Learning through failure: The strategy of small losses. In B. M. Staw & L. L. Cummings (Eds.), Research in organizational behavior. Vol. 14 (pp. 231-266). Greenwich, CT: JAI Press.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The Posttraumatic Growth Inventory: Measuring the positive legacy of trauma. Journal of Traumatic Stress, 9, 455-471.
- 徳吉 陽画・岩崎 祥一 (2014). 自己成長主導性尺度 II (PGIS - II) 日本版の開発と心理的測定 心理学研究, 85, 178-187.
- Weigold, I. K., & Robitschek, C. (2011). Agentic personality characteristics and coping: Their relation to trait anxiety in college students. American Journal of Orthopsychiatry, 81, 255-264.

—2015. 1.30受稿, 2015. 3. 7 受理—

Influence of beliefs about failure on personal growth initiative and psychological well-being in university student.

Hideaki SUZUKI (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Sayaka ARAI (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Tomoko IWATA (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Akimitsu MARUYAMA (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Mari TANAKA (*Tokyo Seitoku University*)

The present study aimed at investigating the influence of beliefs about failure on personal growth initiative and psychological well-being among university students. A total of 251 university students completed a questionnaire. The results of a multiple regression analysis indicated that personal growth initiative is positively correlated with “learning orientation from failure” and negatively correlated with “negative affective valence of failure.” Moreover, psychological well-being, in general, is positively correlated with “intentional behavior” and “planfulness”; therefore, it is conceivable that “learning orientation from failure” improved psychological well-being through “intentional behavior.” The present study not only elucidates that recognizing failure is a growth opportunity but also suggests that motivation for intentional behavior is significant for growth. “Using resources” is positively correlated with “Self-Acceptance” and negatively correlated with “Autonomy.” Thus, personal growth initiative does not necessarily improve psychological well-being.

Key words: university student, beliefs about failure, personal growth initiative, psychological well-being

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University

2015, Vol. 15, pp. 111-118